

## 江戸時代トップアマの実力

古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

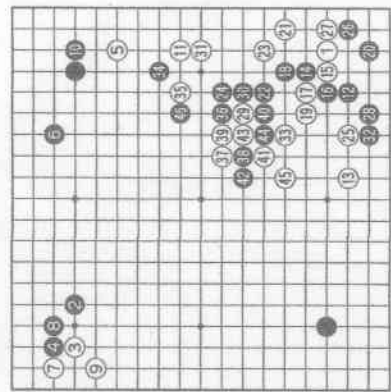
現在の囲碁界では棋書の充実や情報伝達の早さもあってトップアマの棋力向上は著しいが、江戸時代のアマの実力はどのくらいだったのだろうか。

この時代、プロとアマは厳密に区別されていなかったが、家元四家は幕府から俸禄を受け、布石や定石の細かい変化などは「秘伝」として家元に近い人しか知ることができなかった。そうした状況でも現代に名を残す在野の強豪はいくつもあった。賭け碁で全国を巡り生涯に三千両もの大金を稼いだとされる「阿波の米蔵」こと四宮米蔵(1769~1835)はその一人である。米蔵は淡路島の出身、独学で碁を学び現在の貨幣価値で億を超える収入を得た。ただし勝ち金はほとんど遊興に使ってしまったという。

アマ棋界で敵なしとなった米蔵は、徳島藩の後援を得て家元の第一人者本因坊丈和(1787~1847)に二子局十番碁を挑んだ。

図は3勝3敗で迎えた第7局。布石から米蔵は一步も引かず、剛腕の丈和に白15、17と出切らせて戦いの碁に持ち込んだ。黒32から34で白35を誘っての黒36マガリなど流れるような打ち回しでペースをつかみ、一時は必勝形を築き上げたが、丈和懸命の粘りでジゴとなった。

10年後「名人碁所」に就いた丈和は当時34歳、米蔵52歳。二子局は結局十一番打たれ丈和が6勝4敗1ジゴでかろうじて勝ち越し、米蔵は三段を許された。



本因坊丈和と四宮米蔵による二子局(1~46)。305手でジゴ。

## 因島を知らしめた本因坊秀策

古作 登 (大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員)

歴史に名を残す碁打ちは数多いが、本因坊秀策(1829~1862年)は最も人気のある棋士の一人だろう。秀策は備後国因島(現在は広島県尾道市)の出身で幼名を虎次郎といった。1837(天保8)年わずか9歳(数え年、以下同)で江戸に上り本因坊丈和に入門。11歳で初段を許される早熟ぶりだった。晩成で知られる師の丈和が初段に昇ったのは16歳、丈和は秀策のことを本因坊道策以来「百五十年に一人の碁豪」と絶賛し、本因坊家のさらなる隆盛を期待した。

15歳で四段昇段、秀策と名を改め1846(弘化3)年、丈和最大のライバルであった八段・準名人の井上幻庵因碩と打ち、二子局打ち掛け、あらためて定先で勝って七段の実力ありとされた。2年後には六段に進んで正式に十四世本因坊跡目となり、御城碁19戦無敗の記録を残すが1862(文久2)年、七段の時に疫病の門下生を看護し自身も病に倒れ34歳の若さで早世した。秀策の碁や人柄をたたえ、生地には「本因坊秀策囲碁記念館」や記念碑が建てられ、全国からファンが訪れるようになった。



尾道市因島の本因坊秀策記念碑、台座は碁盤の形をしている。すぐ隣に復元された秀策の生家と記念館がある。

因島市(2006年尾道市に編入合併)は1997年に碁を「市技」に制定、囲碁まつりやプロ・アマ棋士が参加する「本因坊秀策杯」「女流秀策杯」の棋戦を開催、地元には以前「本因坊」の名を冠した日本酒(備南酒造)も存在した。